

第4回

近代建築消滅都市仙台に残る
東北大学の歴史的校舎群

東北大学特任教授・キャンパス計画室長

杉山 丞

近代建築消滅都市仙台

第2次大戦において壊滅的な破壊を受けた仙台は、わずかに残った宮城県庁や政府米倉庫群などの歴史的公共建築も次々と再開発の名目で解体され続けた結果、今日市内に残る近代建築の数は40棟を大きく下回り、東北大学片平キャンパス内に残る約20棟でおよそその過半数に達すると言われています。

その片平キャンパスも、平成8年にすべて売却して青葉山に移転する方針が発表されたことで、その近代建築の行く末に多くの市民の関心が集まり、保存運動も起ります。そして平成14年に、こうした世論にも呼応する形で移転計画を見直し、片平キャンパスの一部を今後も保有し続け、ほとんどの近代建築を保存活用していく方針が決定されました。

75年越しの正門軸線整備事業

昭和初期に、正門からの大路を作りその突き当たり本部を置くという構想が作られ、この大路に沿って建てられた旧理学部化学教室が、平成15年に法人本部棟として保存改修されました。その斜め向いに建つ旧帝大図書館も、大学



改築されたエクステンション教育研究棟、左手が法人本部棟

史料館として広く市民にも活用されていますが、大路の正面に作られた旧本部棟だけは、木造二階建ての貧相な建物であったことから、これを

重厚なデザインで改築することで逆に歴史的な構想を受け継ぎ、正門からの軸線を受け止めるシンボリックな建造物へと、平成22年に生まれ変わりました。

商店街に面した大学の顔の保存

東北大学には、仙台城址に向けた正門とは別に、仙台市中心商店街につながる北門と呼ばれるメインゲートがあります。

この北門に面する旧金属工学教室は大正13年より今日まで、東北大学の顔として市民に親しまれてきた建物ですが、構造的に弱く、長らく使われずに放置されてきました。それ故全面解体して同じデザインで再生する改築計画も検討されてきましたが、オリジナルの外壁を惜しむ声が学内外から寄せられ、最終的には外壁を保存しながら



旧金属工学教室の外壁保存再生完成イメージ図

内側を改築するという複雑で手間のかかる工法で整備が進められています。(完成は今年春の予定)